

謝辞

20年以上振りに戻ってきた大学が私を優しく迎えてくれた。平成16年春、心地よい春のそよ風が私を包んでくれた。懐かしい教官がいた。懐かしいキャンパスがあった。懐かしい学び舎があった。私の2年間の大学院生活の始まりであった。

2年間かけてやってきた情報教育の陰の部分に関する研究、そして、私が23年の教員生活で実践してきたこと、感じてきたことを綴ってきたことを論文として綴ってきた。

思えば、大学へ入学したでの18歳の時、私にコンピュータとの出会いを教えて下さった山崎先生、青木先生は、私が今こうして、情報に関する研究をしている原点となった。そして、大学院に来て、再び山崎先生にお世話になることになった。

「通称～心配の種」と山崎先生言われ、誰よりもかわいがっていただいた私は、もちろんこの分野の研究には力を入れていたが、心配させるその名の通り、去年は、いろんなことにエネルギーを使った。大学院説明会のビデオを作ったこと、七夕飾りを作ったこと、情報機器の授業を手伝わせてもらったこと、学生の名刺づくりをしたこと、自転車小屋の前で挨拶運動をしたこと、毎週キャンパスのゴミ拾いをしたこと、雪かきをしてダイエットに挑戦したこと、情報機器入門で知り合った学生達に、「院生便り」などと称して教員を目指すための心構えみたいのを語ったこと、自分のやる授業や研究会には、学生をたくさん呼んだこと、エクセルを勉強したい学生をどんどん部屋に連れてきて仕込んだこと、そして、いつまでも私の心の財産となるであろうイルミネーションをキャンパスに灯したこと。いろんなことにエネルギーを使ったが、みんなみんな楽しかったし、充実していた。

そして、早2年の時が流れた。雪が深いキャンパスの中にそびえ立つ目の前の桜の木にも小さな芽が少しずつ膨らんでいる。春はもうそこまで来ている。そして巣立ちの季節となる。この2年間で多くの方にお世話になった。

さて、本論文を書くにあたって、中心になって指導して下さった山崎先生。学部の時と今回と2度目になる。いろんなことで学内を走り回って、修論のエンジンのかかりの悪い私に、いつも厳しく、温かい言葉をかけていただいた。参考文献もたくさん紹介していただいた。私は、安心して指導を受けることができた。深く感謝申し上げたい。

調査では、函館市内、七飯町、大野町、上磯町のいくつかの小・中学校にお世話になった。学校が日々忙しいのは、私も教員である以上よくわかる。それにもかかわらず、快く調査を引き受けてくれた。また、結果を持っていくと、逆に感謝さえしてくれた。そして、調査に協力いただいた児童・生徒の皆さん、保護者の皆さんにも感謝したい。届いた調査結果が何かしら、親子の会話につながってくれればと思う。

公開授業に関わっては、主催の渡島視聴覚教育研究会の会長岡田司朗校長先生、幹事長の村上直美先生、助言いただいた渡島情報教育研究会会長の吉井保弘校長先生、会場を提供いただいた上磯町立上磯小学校の安藤信男校長先生、学級を貸して下さった附田勇人先生に感謝申し上げたい。

そして、私の周りには、いつも仲間がいた。学校臨床の河村貴仁さんは、私の心理の後輩ということもあって、私の企画にはいつも協力してもらった。本論文でも統計処理にはとてもお世話になった。また、授業を作るにあたって、スキット作成に協力してくれた、学部生の徳永里奈さん、大学院生の上野樹さん、佐々木陽子さん、太田千佳子先生にも感謝である。

「人は人の中で人になっていく。」私は、この2年間積極的に人に関わっていったと思う。そして、多くの大学の先生方や学生と語り、本論文のヒントになることを得た。私は、現職の教員が大学にいるという意味を自分なりに考えた。これから教員を目指す学生たちにはいい意味での影響を与えたいと思い、そんな意味でも、積極的に関わっていった。若い学生たちと現職の教員が協力し合って、研究を進めることの意義を感じた2年間であった。

「私は人を育てることが仕事である。」そして、人を育てることができるような自分になるためには、常に新しいことに挑戦していく自分でいたいし、大学、小中学校の先生方、そして、若い学生さんたちの話に耳を傾け、教育者としての研鑽を続けていきたい。

春はもうすぐそこまで来ている。自分のホームグラウンドで学んだ日々の思い出を大切に、関わった全ての人々に感謝しながら、この学び舎を巣立ち、子どもたちが待つ教育現場で、力を発揮していきたい。